



「ろじたん」の使用事例

そうした倉庫業務の効率化に「役立つのが、日通総合研究所(東京都港区)が開発した倉庫作業分析ツール

国土交通省が7月28日に発
度宅配便の荷物数は前年度比
表した調査によると2016年
7%増の約40億1900万個

製造革新の激流

IoT時代のモノづくり

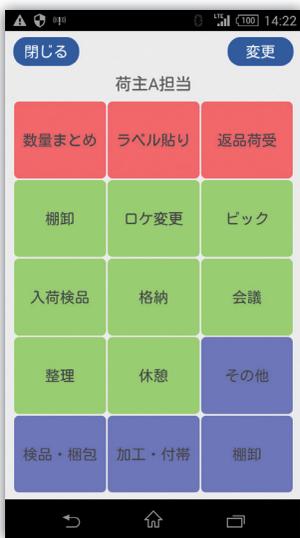


ネット通販の荷物増加により2年連続で過去最高を更新した。一方で、宅配前の荷物を仕分ける倉庫作業の現場では人手不足が益々深刻化し、人材確保と業務効率化が事業者の生命線に分ける喫緊の課題となっている。

導入しやすさ、中小に人気

作業時間計測で倉庫作業を可視化

15年10月のサービス開始から今年8月中旬までに物流事業者など累計110拠点での導入実績がある。千田裕士氏(同社 Advanced Technology Unit)の



「ろじたん」の操作画面。一定時間ごとに画面の作業内容をタップするだけ

2年後のサービス展開目標は常時220拠点。事業者のニーズに応え、使い勝手も進化している。昨年12月には位置情報を検知するビーコンと連動した

計測や分析にいかにか手を掛けずに、中小が導入しやすい価格で提供できるのか。進化の方向に期待がかかっている。

「ろじたん」だ。アンドロイドスマホアプリとWEBの連携により各作業にかかる時間が簡単に計測できるツール。各スタッフが腰に付けたスマホの画面上で、一定間隔の通知時に実施中の作業ボタンをタップするだけで、一日の作業履歴や歩数を記録できる。WEB上に蓄積したデータは集計・分析ツールを用いてダッシュボード上にグラフや表として「見える化」して作業の見直しを検討可能。オプションサービスとして物量や生産性の推移グラフと作業時間分析を連携させる機能もあり、過去の実績と比較検証しやすくなっている。

「倉庫業務は実態の把握にコストや手間がかかりすぎていた。千田氏は従来の問題を指摘する。特別なシステム構築や設定が

「手軽に実態を把握」

「導入は7割が物流事業者ですが、最近では倉庫業務の効率化を求める荷主側の導入も増え、自動化システム導入前の検討業務作業や工場など物流以外のニーズも増えてきました」(千田氏)。

今後、短期的には自社の業務効率率が同業種の中でどのレベルにあるのかを見える化するべく、中長期的には、AI(人工知能)を活用したボタン操作の自動化や改善レポートサービスの展開も検討している。

「準備作業の時間など、これまで計測できていなかった部分のデータが取得できることなどに評価が高い。ケースにもよるが、人員配置の最適化で人件費を15〜20%削減できた事例もある」という。

特に中小規模の倉庫業務は手作業が基本でデータを自動収集しにくい。しかも業務内容は検品からピッキング、梱包と多岐にわたる上に作業員の習熟度もあり、実態を把握するには、作業時間を手書きと手入力で集計したり、コンサルが数日間張り付けて作業内容を調べるしかなかったのだという。こうした手間とコストの課題をクリアするべく

要らず、低コストで導入できるのが、「ろじたん」の最大のウリ。アンドロイドスマホやタブレット、Wi-Fiルーターなど必要な機材は全てレンタルでき、月額利用料金は1年利用・10名で3万円、同30名で5万円と安価なため、20〜40人程度の小規模物流事業者からの人気を集めている。

サービスも開始し、どの場所でも作業が滞留しやすいかを把握することでレイアウトや作業内容の変更などの検討も可能に。7月のアップデートでは、作業日報の作成や作業別算出コストの算出、超勤集計なども、ボタン一つで簡単にレポート生成できるようになった。